

いのちの小道

田中 純子

透徹した秋空の下、紅葉した公孫樹並木の道を通りました。夕日に照らされ黄金色に輝く木々を見ながら、この景色を見られただけでも生まれてきて良かった！と思いました。そしてこれらを造られた方に感謝しました。

その方との出会いは21才の春でした。読書好きの私が時折感じたのは欧米文学にこれだけ影響を与えているキリスト教で何かしらという疑問でした。教会へ行ってみようと出かけてしばらく後、聖書を開いて目に止まったのは「イエスは彼に言われた。『わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。』」（ヨハネ 14・6）でした。この様に言い切れる方は神しかないと思いました。そして、私はイエス・キリストを信じ従う決心をしました。間違っていたら戻れば良い位の軽い気持ちでした。それがいつしか半世紀を越えて聖書の言葉と共に歩むことになっていました。

その初めは、教会に結婚式と葬式とが同時に起きた時でした。多くの人が結婚式に参加する中、一組のご夫妻が葬儀に出席されたのです。伺ってみると「祝宴の家に行くよりは、喪中の家に行くほうがよい。そこには、すべての人の終わりがあり、生きている者がそれを心に留めるようになるからだ。」（伝道の書 7・2）とあるからですと言われ、み言葉と共に歩むことを教えられました。それから何かある毎に聖書を開き神の言葉を求めました。結婚の時、子育ての時、日々の歩みの中で、又人に相談され励ましの言葉を求めた時も聖書はいつも応えてくれました。

ある日、夫が転勤となり、先に単身赴任していた彼と候補の家を見に行きました。途中夫はウツ！と言って小川に口のを吐き出したのです。真赤な血が流れていきました。昨日からだと言います。私は急に心配になりあれやこれやで心は千々に乱れ、帰りの新幹線ではそのことばかり考えていました。家に着き、まず心を静めようと祈り、聖書を開きました。するとそこには「わが子よ。...あなたが横たわるとき、あなたに恐れはない。休むとき、眠りは、こちよ。にわかにかこる恐怖におびえるな。...主があなたのわきにおられ、...守ってくださるからだ。」（箴言 3・21～26）とありました。その時、私は、夫が病気には違いないが、心配しなくても大丈夫なのだと思え、その晩はぐっすり眠りました。翌日の昼頃、夫から電話があり、鼻血が喉にたまり出ていたようで止血剤をもらったので大丈夫と伝えられました。平安とは何かを教えられた体験でした。

聖書は、私に道を教え、真理を伝え、いのちを示し、喜びも平安も希望もここにあると伝えて
います。「夕暮れ時に、光がある。」と語られ、私はこの光と共にいのちの小道を今日も安心
して歩いていきます。